

【佳作】

いっちょうら

中井香奈江・大阪府

クリーニング店の受付をするようになって五年になる。

高齢になった両親の家業を手伝い始めたある日、年配の男性が小さい紙袋を提げ、遠慮がちに店の前に立っていた。色のあせたポロシャツにジャージーで、四角い顔にしわをよせ、お辞儀をするように入ってこられた。そして節くれた手で丁寧に取り出して、カウンスターの上に白いシャツとグレーのズボンが置かれた。きちんとたたまれているが、何十年も前の古めかしいデザインであった。

シャツにシミはないがやや黄ばみ、衿や袖口はすり切れて、ボタンが一つない。ズボンも裾の生地が傷んでほつれていた。

「恥ずかしいけど、ワシの『いっちょうら』ですねん」

そう言っただけを下を向かれたので、点検のためじろじろと品物を観察していた私は恐縮した。そして、「長い間、大事に着てはるんですね」と言っただけ、番号タグをつけた。

預かり伝票に書く名前をたずねると、「山下」と安心したような声が返ってきた。伝票をたたくと財布にいれる仕草は、誇らしげにさえ見えた。

シャツとズボンを洗った後、私はできるだけの修理を施した。ボタンをつけ、表から見えないように手縫いでほころびを繕った。アイロン仕上げをすると、山下さんのシャツとズボンは、無精ひげをそったように若返っていた。

三日後、引き取りに来た山下さんは、きれいになった品物を丁寧に紙袋に入れて、うれしそうに帰られた。その翌日、『いっちょうら』さんは、目で会釈しながら、私のいる店の前を通られた。少し丸い背中が、すくくと伸びて見えた。

それ以来山下さんは月末に一度だけ、いつも同じシャツとズボンを持ってこられた。毎回新たなほころびが来るので、私も毎回ほころびへ針を入れた。「一日でも長く着てもらえますように」と願いを込めて。いつのまにか、私にとっても愛着のある、いっちょうらの品物になっていった。

しだいに、山下さんと世間話をするようになった。近所の文化住宅で一人暮らし、仕事は夜勤のビル警備。ただ、親族や過去の話は聞いたことがなかった。

「おしゃれをして、いったいどこに行きはるんですか？」

あるとき思い切って、山下さんに聞いてみた。

「実はな……月に一回、初恋の人に会いに行くんや」

「デートですか」とたずねてみると、

「いや。遠くから見てるだけや。会わんほうがええんや」

と、そう言いながら、まるであこがれのアイドルの話をするように、初恋の人の様子を話されることもあった。

一年が経った頃、山下さんは突然来られなくなった。入院したらしいと近所で聞くと病院が知れず、預かったままの品物と一緒に山下さんの来店を待ちつつ、一年が過ぎた。

その頃、一人の女性が、山下さんの伝票を持って来られた。

親族と聞いて、私は奥の棚から、山下さんの品物と、ポケットに入ってたままになっていた黒革の定期入れを持ってきた。

すると女性は定期入れ中をおそろおそろ確かめて、入っていた数枚の紙切れを取り出して広げた。子どもが描いたのであるう絵や印字のうすいレシートなどの中に、折りたたまれてポロポロの白黒の写真があった。

写真は、遊園地で幼い女の子を抱いた若い山下さんだった。

目の前の白いシャツとグレーのズボンを着ていた。

「お父さん……」

女性は涙声になって、そうつぶやいた。

女性は山下さんの娘さんだった。父と娘は長年生き別れのままだったそうだが、残念ながら、娘さんは病院で、亡くなってしまった山下さんと再会したのだと言われた。

私は、初恋の人の話をした。

「もしかしたら……それは私のことかもしれません。時々、家まで様子を見に来ていたのでしょうか……」

娘さんの手には、住所が書かれた小さな紙片があった。